

「更女」って何？

柏崎刈羽地区更生保護女性会 会長 酒井美代子

「傷つきし心の子らを抱きよする母ともなりて慈しまなむ」昭和34年9月当時の皇后陛下から更生保護関係者に賜った御歌（みうた）です。総会等の折、最初に歌います。

更女会中央研修で、法務省宮田保護局長が講義された内容の一部を紹介します。『「傷つき



社明運動の準備作業です

し心の子ら」と歌われていますが、心は見えません。見えない「心の傷」が見える想像力を持ち「あなたは、私達の地域社会の大事な一員です」というメッセージとなる活動がある。それが更生保護女性会の活動だろうと思うのです。活動に当たり求められる態度は「五事を正す」です。五事とは「貌・言・視・聴・思」で、和やかな顔つきで思いやりの言葉で話し、澄んだ目でものごとを見て、耳を傾けて聴き、真心を込めて相手のことを思うことを言います。『私達も「五事を正す」態度で活動して参りたいと思います。本年度の総会も無事終了し活動が始まりました。皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

保護司のつづやき

いよいよ終活

いいえまだまだ

保護司 北村 勤

後期高齢者の仲間入りも近づき、保護司の仕事も卒業間近となり、いよいよ終活を身近に感じる年齢となった。

新型コロナ禍による2年間、スポーツ大会がほとんど中止になったことで目標を失い、昨年からは規制されながらマラソン大会は再開されたが走れない。ランニングに身が入らなくなったのだ。

昨年は久しぶりに仲間と火打山と妙高山の登山に行ったが、妙高山の険しさにたじろぎ、妙高山はスルー。体力の衰えとはこういうことか。

「終活」が心をよぎる。今年からは、地域の仕事、アルバイトも終わり、心身ともに自由人となった。この時間を楽しもうと思っている。



笹ヶ峰の登山口で

誘われて、「ゲートボール（GB）」の仲間入りをした。仲間の中では、最年少だ。GBは高齢者のスポーツとして普及しているが、ジュニアの全国大会も国際大会もあるとか。繊細で奥の深いスポーツで、先輩諸氏になかなか合わない。今はこれをクリアしないと「終活」できないよ



演劇のある町をめざして

劇団THE風・FOU座長

猪 俣 哲 夫

学生の頃から、いつか演劇をやりたいと思っていた。本当は映画なのだが、素人には難しい。演劇なら仲間を集めて、適当に台本を書いて、練習すれば発表ができる。映画と違って、芝居は公演という発表の場に容易にたどりつけるのである。

戦後、青年団や職場での演劇活動が盛んだったのは、娯楽がなかったこともあるが、言いたいことをつとり早く表現できたからである。

そんなわけで我らの劇団は1986年、柏崎演劇研究会の指導を受け、旗揚げすることができた。以来、オリジナル、

既成作品など合わせて55回の公演を行ってきた。

よく37年も続いたと思うが、続いたというよりやめなかつただけの話だ。活動自体、そ



れほどほめられたものではない。結成から15年間は年2回だった公演も、その後は年に1度の演劇フェスティバルに参加するだけとなっている。

その間メンバーは減り続け、観客も減り続けている。発展しているというより、ひたすら縮小している。実際のところ何度か解散しようかと思っただが、メンバーにたしなめられて思いとどまっている。

そんな弱小集団ではあるが、わが町においては存在そのものに価値があると思っている。いつぞやの公演は60人の動員だった。たったこれだけの人しか見なかったわけだが、それでもその人たちに見てもらったということに意味がある。また、作者名や作品名が人の目に触れることも重要だ。いつも公演の際は柏崎日報に取り上げてもらうのだが、おそらく別役実、竹内銃一郎な



んていう劇作家は、ほとんどの人が知らない。作品も一部の芝居好きでなければ見たこともないはずだ。それでもそうした記事が出ることで、この町の文化度は上がる。

つまり、「劇団ザ・フーは毎回、刺激的な舞台を見せてくれる」、「へんな劇団がこの町にある意味は大きい」と思ってもらえることが、我らのレーゾンデートルである。